

つかこうへい症候群

館山寺殺人事件（黄昏のベアトリーチェ）

登場人物

本村伝右衛門部長刑事

鈴木銀四郎刑事

朝霧あかね巡査

大山田八五郎容疑者

暗転の中、突然大音量の音楽が流れ始める。

おそらく観客はこれから何がおこるのかいきなり混乱するはずだ。

照明がつくと、電話越しにがなりかけている男が居る。

彼こそがこの物語の登場人物の一人、本村伝左右衛門である。

観客には彼のセリフはほとんど聞こえないはずだ。

本村 「ふざけるな！鑑識ごときが誰に向かって大口叩いてんだ？

何も新しく死体をこさえてくれと言ってる訳じゃないんだ！

殺された側にもどうせ記録に残るなら美しく残りたいって

気持ちがあるだろう。それが何なんだこの写真はよお！

ろくに化粧はしてねえわ、髪型は崩れてるわ！

用事のない休日のおぼちゃんだってもう少し身だしなみに気を使うだろうが。

は？何をしてほしいかだと？

修正だよ修正！どうせアンタもデジカメ使ってたろ？

パソコンでチョコチョコのバツバだろう？

こんな写真じゃ俺が萌えねえんだよ！もっと俺のオスの本能が、

刑事としての滾りをエレクトさせるような写真にしてくれよ！

服がはだけて柔肌がちらりと見えるとかよ！

まるでまだ生きているみたいに透き通るような白い肌とかよ！

撮り直しが出来ないんなら、モデルでもマネキンでも使って新しく作れ！

馬鹿野郎！」

そこへ新たに一人の男がやってくる。

少しもうつむく事は無く、堂々とした歩みで入室してきた男。

じっと本村を見つめている。

鈴木 「今のは聞かなかった事にしましょう」

本村 「誰だ！」

鈴木 「静岡県警館山寺署、本村伝右衛門刑事部長とお見受けしますが」

本村 「本村は確かに私ですが、人にものを尋ねる時は自分から名乗るべきだと、習わなかったのかね」

鈴木 「失礼。本日付で福井県警から転任となりました。鈴木と申します」

本村 「鈴木じゃわかんねえよ！ここをどこだと思ってるんだ！浜松だぞ浜松？

石を投げりゃ鈴木にあたる土地だぞ！

そこへどのツラ下げて鈴木だなんて名乗りやがる！」

鈴木 「失礼、越前福井じゃ北尻、佐澤、下坊、栃川なんてのが主流の苗字でしたので」

本村 「地味な割に奇天烈な名前が多いな福井県民が！…福井の鈴木？ああ、君がそうか！

前の部署では随分と元気にやっておられたようですね。

巡査部長に一発昇進されとか。なかなか優秀だ」

鈴木 「あなたが本村伝右衛門部長刑事ですか？」

本村 「いかにも、私がそうです」

鈴木 「想像したより背が…（言葉を探して）コンパクトでいらっしやる」

本村 「少小軽短美と言っていたんだけど！

今の世の中なんだって小さく薄くなってるんだ！

人間だって流行りに合わせるべきだろう。

おまけに私は日に一度しか飯を食わなくてもやっていける。

コンパクトで燃費もいい！小さな体、大きな未来。本村です」

鈴木 「光栄です。あなたのような偉大な刑事と机を並べることができるとは」

本村 「並べるのは机だけにしておくれ、肩を並べることが絶対には許さんからな！

で、君の名前は？」

鈴木 「鈴木銀四郎です」

本村 「銀四郎？四人兄弟の四番目か？」

鈴木 「実家は福井県は鯖江市で代々眼鏡職人しております。

私はそのこの四代目。父の三太郎は北陸地方が誇る金細工を施した眼鏡で、

ちよいと話題になったものです」

本村 「職人の跡取りが捕り物合戦を生業にするとはな」

鈴木 「残念ながら、私は生まれつき目がいいもので！

今でも両目とも視力は二・〇です。お客様の苦しみがわからない者に、

良い眼鏡など作れるはずがない！落胆した私がたどり着いたのが、

国家権力という世界なのです！

いつか私は警察組織の頂点に上り詰め、膨大な数の書類を部下に読ませ、

世の中の警官という警官を近眼にし、実家の眼鏡を官給品としてみせましょう！」

本村 「見上げた向上心だ。しかし名字が鈴木で名前が銀四郎では、

ちよいとアンバランスじゃないか？」

鈴木 「本村デンエモンって名前はどうなんですか？」

本村 「伝右衛門は、かの九州の炭鉱王と言われた伊藤伝右衛門にちなんで父がつけた。

ふふん。名前に誇りを持っているのは何も君だけではないのだよ。

奇しくも本村家の出自は九州は飯塚方面でね。

私の祖父は炭鉱王伊藤伝右衛門と大正三美人の一人に数えられた歌人、柳原白蓮が暮らした大邸宅…の前を通りかかったことがあるという！」

「子供の頃、デーモンってあだ名でしたか？」

「音楽でもいがかかな？」

「そうなんですね？」

「質問するは私の役目だ！なぜ自分がここに居るのか理解しているかね」

「あなたは静岡県警きつての切れ者だと伺っています。

なんでも最近まで、東京にいらしたとか？」

「東京警視庁刑事課特捜部第一課におりました。

ま、いわば捜査の第一線というやつですな」

「なぜ東京の刑事さんが静岡に」

「能力の分散化という奴です。優秀な人材が都市部に集中しているのでは、

地方で何かがあったとき、混乱が起きてしまう可能性がある。

それを防ぐ為に人材を地方に配置するのです」

「自分がそれに見合うだけの人材だと言う訳ですね」

「もちろん。私が着任したからには、この静岡県は浜松市、

館山寺も騒がしくなるだろう。

今頃東京では私を恐れて潜んでいた犯罪者たちが、

春の陽気に誘われて顔を出す虫や獣の

ようにうごめいている事でしょうな」

「本村伝右衛門ある処、事件ありというわけですか」

「それが宿命というもんです。…クラシックは嫌いなのかな？」

「失礼、扉をあけた瞬間爆音が響きましたので。鼓膜が弱いんですよ。

あんまり大きな音だと脳みそが振り回された缶ビールみたいに

パンパンなるんですよ」

「音楽は良い。敏感になった神経を鎮めてくれる。

この部屋ではよくワーグナーを流しますよ」

「職務中ですよ？」

「ちょっとした人生のカンフル剤だよ。特に『ニーベルングの指環』は素晴らしい。

知っているかね？」

「まあ、題名くらいは」

「ほぼ毎日聴いています。聴き始めると入り込んでしまつて

仕事どころではなくなるのが

タマにキズだが。なにせ全部聞くと演奏が五時間かかるもので」

「仕事してください！」

「ここは、私の現場だ！従った方が君のためだ。楽に行こうじゃないか。

ワインでもいがかかな？ハンガリーワインのいいのが入ったんだ」

「職務中でしょうが！」

鈴木

本村

鈴木

本村

鈴木

本村

鈴木

本村

鈴木

本村

鈴木

本村

鈴木

本村

鈴木

本村

鈴木

本村

鈴木

本村

鈴木

本村

鈴木

本村

鈴木

本村

鈴木

本村

鈴木

本村

鈴木

本村

鈴木

本村

鈴木

本村

本村 「着任祝いですよ。契りの盃といきましよう」

鈴木 「申し訳ない。私は大吟醸しか受け付けられない体なので」

本村 「それはそれは。この街で数少ない楽しみです。

ハンガリーワイン独特の爽やかな酸味と：

そこへ、婦警 朝霧あかねが紙袋と味噌を持って登場。

朝霧 「部長、館山寺味噌いただきました」

本村 「館山寺味噌のまろやかな甘みがたまらない。

あとは炊きたてのコシヒカリをよこせ！」

朝霧 「あら、お邪魔してしまつてごめんなさい」

本村 「ノックもなしに入ってくるとは、君も出世したもんだな朝霧君」

朝霧 「私、今日いつもの通り見回りをしていたら、

裏の漁村のおじさんに声をかけられたの。

『おや婦人警官さん。今日もお務めご苦労さん』なんて、

浜名湖で獲れたばかりのクロダイ片手にね。

私つて、誰にでも愛想よく返事をしてしまふタチでしょう？

職務に忠実に挨拶を返したら、『よかったら持つてきな』っていただいたのよ」

本村 「味噌一パックとは随分と安く見られたもんだな」

朝霧 「これはお通しですわ。本命はこちら！」

あかねが紙袋から日本酒を取り出す。

朝霧 「斗瓶取りした大吟醸おり酒」

鈴木 「大吟醸ですつて！なんと、これが噂に名高い

斗瓶取りした大吟醸おり酒ですか！」

朝霧 「ご存知ですか？斗瓶取りした大吟醸おり酒を」

鈴木 「福井県警時代の同僚に浜松の出身者がおりまして、折に触れ

この斗瓶取りした大吟醸おり酒の事を自慢されていたものです」

朝霧 「私もよく嗜みますわ。この斗瓶取りした大吟醸おり酒を。

フルーティーな香り。トロミのある口当たりやなかにほんのり甘味、

シュワつとした炭酸がまるでシャンパンにも似た爽やかな喉越しを

醸し出す一品」

鈴木 「ああ、斗瓶取りした大吟醸おり酒よ！忘れじの恋人にも似たその名前。

早くそのしたたりを私の唇に！」

朝霧 「斗瓶取りした大吟醸おり酒」

鈴木 「斗瓶取りした大吟醸おり酒」

朝霧 「好みが合いますわね、私たち」

本村 「クドい！なんなんだ君らはさつきから『大吟醸』『大吟醸』つて、

朝霧 酒瓶抱えて味噌舐めて、私の操作室はガード下の居酒屋じゃないんだぞ！」

「あらあ、高い腕時計ひけらかしてバーで踏ん返り返ってる男より、電車が通るたびにガタゴト揺れるブラック作りの居酒屋で、日本酒で湿らせたその舌先に味噌を乗せるその仕草に、女はダンディズムを感じるものよ」

鈴木 「お嬢さん！」

朝霧 「いけませんわ！血よりも色濃くワインが全身にしみわたり、大吟醸の涙を流すこの私をお嬢さんだなんて」

本村 「ただのアル中じゃねえか！」

鈴木 「あなたの血がワインだというのなら、私は吸血鬼にもなりましょう！あなたが大吟醸の涙を流すなら、そのしずくが落ちた大地には、きれいな花が咲くでしょう！

いや、たわなに実る魚沼産コシヒカリの稲穂がここに！」

本村 「なんで浜松で魚沼産コシヒカリが生えるんだ！」

鈴木 「地元北陸では真冬も雷が鳴り響きます。凍った空気を切り裂く、一筋の閃光！見知らぬ土地で不安と期待に乱れる僕の心の吹雪を蹴散らす、真冬の遠雷の如き、あなたのお名前は？」

本村 「朝霧あかね君です」

「まさにあなたの為にあるような美しい響きだ」

本村 「私の秘書です。そしてパートナーです。公私によらず」

朝霧 「体中のほくろの数を数えながら、

身を寄せ合ってベッドシートの大海原を航海する。

時には部長の言葉を文章に打ちなおしたり、玉露を入れたり

ブルーマウンテンを淹れたり、肩を揉んで差し上げたり、

針を打って差し上げたり、たまには骨盤のゆがみも直す。

そんな間柄ですわ」

本村 「有能です、かわいいやつです。ここへ赴任したその日にモノにしました！」

朝霧 「されちゃいました」

「恥ずかしくないんですか！ 聖職の中の聖職であるあなたたちが、

市民を守る正義の味方がモノにしたのだのされたのと！」

「出会って五秒で口説き文句を謳う優男に言われたくはないね。

お巡りさんだって人間だ。うんこもすればおしっこもする。

アフターファイブにゃ恋もする。

地元じゃ女の口説き方も教わらなかったのか？

福井県警じゃ東尋坊の先っぽから身を投げようとした犯人を

ことごとく説き伏せたと噂の鈴木銀四郎君ともあろうお方が」

鈴木 「富山県は黒部ダムで見つかった死体を調べると、

石川県は金沢の茶屋町でちょっとした友禅染めの呉服屋にいきわたる。

若旦那を問い詰めた挙句、福井県は東尋坊まで逃亡するのがお定まりです」

本村 「二時間ドラマですな」

鈴木 「いつだってそうです！雪国北陸の犯罪者なんてのは、たいてい最後には東尋坊にやってくるモンなんです。

まったく迷惑な話だが、その道理を知っていればホシを挙げるのはたやすいのです」

本村 「その手腕を是非この浜松、館山寺でも発揮していただきたい。朝霧君！」

朝霧 事件の長所を本村に渡す。

本村は、受け取った調書を鈴木に差し出す。

だが、すぐにその調書を床に落としてしまう。

本村 「（鈴木に） どうしました？ 拾ってください。あなたの調書です」

鈴木は納得できないままその調書を拾い上げる。

にやにやしなながら本村が受け取りにいくが、その手に渡る直前で鈴木が調書を床に落とす。

本村 「？」

鈴木 「拾ってください。あなたが書くべき調書です」

こうして、本村は渋々調書を拾う。

本村 「（たたき落として） 拾ってください。あなたの調書で……」

鈴木 「（拾ってからたたき落として） 拾ってください。あなたが……」

そしてまた床に落とす、それを本村が拾って落とすという喧嘩がしばらく続く。見かねた朝霧がそれを拾い上げ、調書を読み上げる。

朝霧 「被害者、大山アイ。二十七歳。四月九日、館山寺奇願岩近くの海岸で

遺体を発見。死因は頸部圧迫による窒息死。

発見者は浜名湖の遊覧船に乗っていた乗客」

本村 「名前は？」

朝霧 「本田朔太郎」

本村 「また随分とありきたりな名前だな」

朝霧 「司法解剖を行った松田三郎検死官は……」

本村 「おいおいおい、鈴木に本田に松田ときたか！じゃあ何か？

犯人護送した運転手はフォルクスワーゲンって名前かよ！」

朝霧 「翌日午前十一時、浜松西警察署に犯人を名乗る人物が出頭。

名前は大山田八五郎。二十五歳」

鈴木 「同年とは奇遇だな。

未来に向けての希望も不安もまだまだ先に残っていただろうに、

なぜ道を踏み外してしまったのやら」

本村 「しかし勘弁してほしいもんだ！ 三郎に銀四郎に八五郎じゃ、安い落語の登場人物じゃないか。

名前に負けじとイカツイ髭面の大男か？ 竹刀振り回して下駄履いてるような」

朝霧 「まるで伝説のプロレスラー、タイガーマスクのような方よ！」

本村 「直虎に、タイガーマスクか！ トラトラトラ！ 殺人犯の襲撃だ！」

鈴木 「それでその犯人はどこにいやがるんだ！」

大山田 「僕はここにいます！」

犯人 大山田が声を上げる。

それは客席のどこかに隠れているのでも良いし、後ろから悠々と出てくるのでも良い。とにかく、犯人でありながら誰よりも目立ち、カッコよく登場する。

歌ったり踊ったりするのもいい。プロレスの入場のようでもよい。

とにかく、ここまで待ちに待ってようやく俺の出番だという気合を持って。

鈴木 「なんなんだコイツは！」

いつから犯人が警官より目立っていい世の中になったんだ！」

本村 「いいじゃないか！ 見たか今の〇〇〇〇のような登場のしかたを！」

コレだよコレ！ 彼の挑戦的な登場の態度！

こういう奴こそ私の相手にふさわしい！ 黙秘もするだろう！ 否認もするだろう！

だが覚悟しろ。これからこの場所のみっちり、

奴が被っている羊の皮をひっぺがして！ その胸うちに飼っている

獣の本性を暴いてやる」

朝霧 「ああ！ このヒリつく空気。これから白熱の取り調べが始まるのね！ うずくわ！」

一同は、これから殴り合いの喧嘩でもするかのように好戦的な空気を醸し出す。

大山田 「(あっさり) 僕が犯人です！ すいませんでした！」

本村・鈴木・朝霧 「えー！ ！ ！ (がっかり)」

大山田 「え？ なんですか？ なんですか？」

本村 「お前なあ！ その嘘でも『俺は殺ってねえ』っていうところだろ？」

大山田 「なんでですかそれ！」

本村 「犯人をどうやって落とすかが見せ所なんじゃないか！」

大山田 「いやでも…」

本村 「終わっちゃうだろ！ いろんな事が！」

まだ始まって○分しか経ってないんだぞ！」

朝霧 「少しは往生際を悪くしようって男気も無いの？ 意気地なし！」

鈴木 「俺は福井県警で、いけしゃあしゃあと罪を逃れようとする奴を

山ほど見てきた。だがそんな奴も人の子だ！

最後は涙を流しながら『刑事さん、あっしが悪かった』と跪く！

これが刑事の醍醐味じゃ無いか！

東京からいらっしやった本村部長刑事の落胆がわかるか！」

本村

「いいんだ！ここはあのネオンきらめく大都会東京では無い。

この開けた空のように、犯罪者の良心を邪魔するものも無いのだろう。

だが、それならそれで、どういう結末に持っていくかだ」

大山田

「東京の刑事さんなんですか？」

本村

「まあ、私が離れたからには東京ももはや霞んだ埋立地に過ぎんがね。

正直始めは浜松の中心街から遠い事もあって、少々不安に思っていたが、

中々どうして館山寺という所は実に静かでないもんだ」

大山田

「はつきり、何も無い場所だって言えばいいじゃないですか」

本村

「そう、確かに。私がしのぎを削ってきた大都会東京に比べれば、さしたる

特徴も無い、公共交通機関は不十分な部分もあるし車が多い割には道路が狭い。

そしてこの館山寺！これといって有名な場所も無い、バスも本数が少ないし、

盛り上がるイベント事も無い。だが、これからは違う。

なぜなら、ここには何も無い。しかし、私が居る！」

大山田

「はい？」

本村

「ここには、何も無い。だが、私が居る」

朝霧

「部長が着任してからよ。大河ドラマが浜松に決まったのは」

本村

「俺だよ、もう五年も前から直虎が来るって言ってたのは」

鈴木

「クニの母も、北陸新幹線でロケ地に遊びに行くと言っていました！」

本村

「俺だよ、北陸に新幹線通したのは」

鈴木

「ただ、静岡にかすりもせず東京に行ってしまったが」

大山田

「どうしよう：・関わっちゃいけないタイプの人達だ」

本村

「私がここに来てから、自分の腕を振るうにふさわしい事件は無かった。

だが今日からは違う！君が、この古ぼけた観光地に花を添えたのだ。

殺人事件という鮮やかな大輪の花をね！」

大山田

「あの、ここには他に刑事さんはいないんですか？」

本村

「覚悟しろ。俺は年がら年中陽気な浜松の気候で育った遠州人とは違う。

これからお前がした事を徹底的に追求してやる」

大山田

「大体ここはどこですか？普通取調室ってもっと狭いんじゃないですか」

本村

「ここは私の捜査室だ。」

私は刑事になったその日から、理想の取り調べというものを追い求めてきた。

よい仕事はよい環境から生まれる。

どうだ、私の捜査室は！私は犯罪者だからって色眼鏡で見ようなんて思わない。

長時間座っていても耐えられる椅子。緊張感を和らげる明るい照明。

そして、イバラのように尖った心に一輪の花を咲かせる音楽」

大山田

「とても警察とは思えない」

本村はレコードを取出し、プレーヤーにかける。



本村 「君、出身は浜松らしいね」

大山田 「ええ、ずっと」

本村 「ウエルカムミュージックといこうじゃないか」

本村が音楽をかける。

「うなぎのじゅもん」が流れる。

予想外の音楽が流れてきた事に、大山田はえらく動揺する。

一番が終わった頃、

大山田 「は？」

本村 「浜松で一番有名な曲だそうじゃないか」

大山田 「え？いや、まあ有名なのは有名ですけど」

本村 「私はB面の方が好きだがね」

本村は、レコードをひっくり返してかけ直す。

浜名湖パルパルのあのフレーズだけが流れる。

大山田 「（そこ）だけ？」

本村 「浜松ではこの二曲が流れると自分も歌わずには居られなくなると聞いている」

鈴木 「（朝霧に）そうなんですか？」

朝霧 「初めて聞きました」

本村 「さあ！」

大山田 「いや歌いませんよ！東京の刑事さんが浜松にどんな誤解を持ってるんだか

知りませんが、その歌は単に昔からコマーションで流れてるってだけで……

そもそもそんなレコードどこで買ったんですか！」

本村 「イオンだ」

大山田 「……イオンはそこまで万能じゃない！」

鈴木 「どこのイオンですか」

本村 「あの……でかい道路の近くだ」

大山田 「全部そうですよ！」

本村 「私も驚きました。この春にこちらに来たんですが、ツタヤに行ってみたら

（バンド名）のソフトを差し置いてお祭りのプロモーションビデオが流れて

居るじゃないですか」

大山田 「まあ、一時期は」

鈴木 「この調書、表紙に何も書いてないんですが」

本村 「そこが問題なんだよ銀四郎君。せっかく起こった記念すべき事件だ！

過去の記録を調べたが、この館山寺において殺人事件なんて凄惨な案件は

例がないようなのでね。

かといって『館山寺殺人事件』では、あまりに味気なさすぎるじゃないか」

大山田 「別になんだったっていいじゃないですか」

朝霧 「何だっというとはどういう言い方よ！この事件が、

本村伝右衛門の館山寺に置ける最初の事件になるの！

その記念すべき瞬間に立ち会っているっていうのに、

もう少し胸を踊らせるべきだわ！

この分厚い胸には筋肉しか詰まっていらないのかしら？

ハートの熱は空っ風に吹き飛ばされたのかしら」

鈴木 「（朝霧に）落ち着いてください」

本村 「私も最初はシンプルに考えた方がいいのかとも思ったさ。

今回は『館山寺殺人事件』で、もしまた人が殺されるような事があれば、

『館山寺殺人事件2』という事で」

大山田 「映画の続編じゃないんですから！」

朝霧 「死んだはずの被害者が、実は生きていて…」

大山田 「やめてください！」

本村 「じゃあ、真剣に考えようじゃないか。これは私の事件だが君の事件でもある。

当事者として共にふさわしいタイトルを決めよう」

大山田 「はあ？それが東京の刑事さんのやり方ですか？」

本村 「そうだ！一流の事件は一流のタイトルから決まるのだ」

大山田 「そんな事はどうでもいいでしょう！僕は罪を認めてこうして出向いてきたんです。

とととと取り調べを進めて下さい」

本村も調書を開く。

本村 「被害者、大山アイ。二十七歳。

四月九日、館山寺奇願岩近くの海岸で遺体を発見。

死因は頸部圧迫による窒息死。また、遺体の一部が欠損」

鈴木 「普通に考えれば、事件が起きた地域名をつけるのが定石ですね」

本村 「とはいえ『館山寺』だけでは何の色合いも無いのでね

失礼、私はこの辺りの土地勘が無いので教えていただきたい。

この館山寺を特色を一言で現すなら、どんな言葉があるだろうか」

鈴木 「（素っ頓狂な声）はい？」

朝霧 「とりあえずは観光協会が発行しているガイドマップから、

めぼしい言葉を抜き出してみました。

『温泉』『地引き網漁』『ロープウェイ』『浜名湖パルパル』『花火』

さあ、どれがいい？」

本村、朝霧、鈴木は期待を込めた眼差しで大山田を見る。

大山田 「いやいやいやいや！この中から選ぶんですか？」

本村 「ダメか？」

大山田 「温泉はいいとして、地引き網漁ってなんですか！」

朝霧 「何でも最近、流行っているそうですわ。浜名湖は湖と言いながら海水が流れ込む

汽水湖という特殊な性質なのね、だから蛸や鯛もとれるんですって」

本村 「その地引き網体験が出来ると好評なんだそうだ」

大山田 「だからって事件のタイトルに入れる事無いでしょ」

鈴木 「『館山寺地引き網漁殺人事件』」

大山田 「意味わかんないじゃないですか」

本村 「つまりこういう事だ」

ここから、本村の仮想の事件解説が始まる。

波の音と鳥の鳴き声。ここは館山寺のサンビーチ。

漁師の大山田と鈴木がやってくる。

朝霧 「ここは館山寺のサンビーチ。穏やかな波打ち際の朝」

大山田 「いや今日も空っ風が強いんだもんで、沖は波が荒れてるらー」

鈴木 「やいやい」

大山田 「その割にいきりっぽいやあ」

鈴木 「やいやい」

大山田 「よしちょっと揚げるぞー」

鈴木 「やい！」

大山田 「やいしょー！やいしょー！」

鈴木 「やいやい」

大山田 「あれ？なんしょ重いな。蛸でもあたけってるだかいや？」

鈴木 「やいやい！」

大山田 「よし、やいしょー！」

網があがってくる。

大山田 「ん？なんぞあのいっとん大きいのは？

ゴミでもいっしょくたに揚げただかいね？」

鈴木 「やーい？」

大山田は近づいていき、急に悲鳴を上げて後ずさる。

大山田 「し、死んだる！人が死んだるや！だで重かっただら！」

鈴木 「（驚き）やーいッ！」

本村が調書を読む。

本村 「こうして、発見されたのが大山アイ二十七歳……」

大山田 「ちよつとちよつとちよつと待った待った待った！」

本村 「『館山寺地引き網漁殺人事件』！」

大山田 「キメるな！」

本村 「なんですか？」

大山田 「何ですかじゃないでしょう！事件の内容変わってるじゃないですか！

しかもこの人（鈴木）『やいやい』しか言って無いじゃないですか」

鈴木 「遠州弁がまだよくわからないもので。

ただ『やいやい』で八割の会話は成り立つと聞いています」

大山田 「そんな事は無い！」

本村 「それにしても、湖なのに海水とはどういう事ですか」

朝霧 「今切口って場所で海とつながってるんです。

大昔に地震で境目が無くなったそうですよ」

本村 「つまり浜名湖は海だと？」

朝霧 「浜名湖は、海じゃないです」

本村 「浜名湖は、海じゃなくないです。しよっぱいじゃん」

朝霧 「浜名湖（こ）ですから！湖です」

本村 「浜名湖という名の海？」

朝霧 「それを言うと浜松の人間を敵に回すのでやめた方がいいと思います」

本村 「海が見たいと言ったのか？大山アイは言ったのか？

肩を震わせ言ったのか。海の青さが怖いと泣いた？」

朝霧 「だから海じゃないって言ってるでしょう！」

本村 「でも……」

朝霧 「お黙りなさい！」

大山田 「（鈴木に）どうゆう関係なんですか（この二人は）」

鈴木 「骨盤の歪みを直したり」

大山田 「は？あの……大体刑事さん、さっき館山寺の奇巖岩付近で見つかったって

言っただじゃ無いですか！

館山寺のチャート海岸でアイちゃんの遺体を見つけたんでしょ！」

本村 「そう！曹洞宗館山寺を入りに、浜名湖を望む館山寺街道を歩き、

長い長い木製の階段を下りて、北西側に見える海岸線。

そこには、酸化鉄によって血のように赤く染まった岩石が広がる。

そこには、岩石と同じく赤いワンピースをまとった。

大山アイの遺体があった。詳しいね」

大山田 「俺がやったんだよ！犯人だっつってんでしょ！

お願いだからまじめに取り調べして下さい！」

本村 「私は至ってまじめだ！俺はなあ！人殺しなんて取り返しつかない行為を行い、

犯罪者に身を落としたお前を、華々しく仕立ててやろうと努力してるんだ！」

鈴木 「殺害方法も平凡、周囲や被害者の衣服には指紋が大量に残り、

お前が出頭しようがしまいがこのままではすぐに事件が解決してしまう。

朝霧 「しかも何の変哲も無い、東海地方の観光地で起きた些細な些細な殺人事件としてね」

大山田 「それでいいじゃないですか！警察ってのは事件の早期解決が理想でしょ？」

本村 「違う！警察の真の理想は事件を未然に防ぐ事だ。」

だから犯罪撲滅キャンペーンなんてのがあるのさ。

どこの警察署に

『事件が起きても大丈夫。二四時間任せて安心一一〇番』なんて

掲げてある？」

大山田 「ジャフか！」

鈴木 「福井県警には：：ありました」

本村 「だが、事件は起きるときには起きてしまうものだ。

起きてしまった過去は変えられない。」

だったらその事件を誠心誠意解決するだけだ」

大山田 「だったら今回の事件は犯人が出頭して解決じゃないですか」

本村 「嫌だ」

大山田 「はい？」

本村 「せっかくこの本村伝右衛門が関わる事件だというのに、

ごく平凡な内容の事件で終わってたまるか！

私はこんな温泉街で終わる人間ではないのだ！

再び東京に返り咲き、並みいる凶悪事件を取り扱うのだ！」

「ちょっと待った、あなた自分から望んでここに来たんじゃないんですか？」

「：：：：」

鈴木 「飛ばされたんだな？東京で使い物ならないもんだから、

地方に流されたんだろう！」

本村 「違う！それは決して違う！現にわたしはこの土地を愛している。

だからこそ降ってわいたこの事件を、館山寺の歴史に刻み付けるために

単なる平凡な事件で終わらせる訳にはいかんだ！」

鈴木 「殺人事件を観光地の目玉にするってのはどうなんですか？」

「未解決ならな！だがこの事件は大山田八五郎という犯人が既に分かっている。

しかし、ただ事件が起きて犯人が捕まったのでは、

勝敗のわかっているサッカーのように価値のないものだ！

人が惹付けられるものは何か。それはドラマだ！

どんな小さな事件でもそこに深いドラマがあれば、人は関心を持ち、

記憶にとどめる。大山田君、君の事件にはドラマが足りない！」

大山田 「はあ：：」

本村 「任せなさい。君を超一流の犯人にしてあげよう」

鈴木 「（本村を挑発する）あなたの手腕が本物か。お手並み拝見といきましょう！」

朝霧 「ああ！その冷たい目、（鈴木に）あなたも羊の皮を被った獣だったのね！」

鈴木 「私はねえ、実力で上下をハッキリさせたいタチなんですよ！」

北陸の代表ヅラした石川県から見下されている福井県民のプライドです！」

朝霧 「うづくわ！」

大山田 「帰りたい」

本村 「さあ、では始めよう。まずは事件のタイトルからだ。

残ったのは『温泉』『ロープーフエイ』『浜名湖パルパル』『花火』」

大山田 「だからそれしか選択肢ないんですか？」

朝霧 「パンフレットからそのまま貰って

『古き良き時代がここにありません。郷愁の浜名湖を望む館山寺殺人事件』」

大山田 「どーいう事ですか！えーからべーな人だな」

本村 「何？」

大山田 「えーからべー！いい加減な人だって言ったんですよ」

本村 「えーけーびー？」

鈴木 「カーゲーベーですよ！」

大山田 「どっちも違う！」

本村 「じゃあ後は『浜名湖パルパル殺人事件』」

大山田 「いやいやいやいや、場所が違うでしょ！」

本村 「だってパルパルだって館山寺だろう！もっと大きな視点で見れば、

館山寺はイコールパルパルだ！」

大山田 「だからって館山寺をパルパルでまとめることあ無いでしょ。

パルパルは館山寺じゃ無いです！いや違う、館山寺ですけど！

館山寺という土地の中の……(キレル) わかれよ！」

本村はレコードをかける。

パルパルのあのフレーズが聞こえる。

鈴木 「やかましい！」

大体パルパルで殺すってどういうことですか」

本村 「つまりこういう事だ」

ここから本村の仮想の事件解説が始まります。

パルパルの喧騒。

朝霧が立っている。

鈴木が爽やかにやってくる。

鈴木 「ごめんよ、待った？」

朝霧 「(鬼のような形相で) んーん、全然待ってないよー」

鈴木 「ごめんごめんごめん、表情と言葉が合っていない！合わせて合わせて！」

朝霧 「あ、そっか。てめえどんだだけ待たせんだよコノヤロー！」

鈴木 「ちがうちがう！そっちじゃない！顔の方の方！」

朝霧 「あ、そっか。んーん、全然待ってないよー♡」

鈴木 「さあ、何に乗ろうか！」

本村 「私、パルバル初めて来たの。」

あ、あれがパルファミリリーってマスコットだよね？」

鈴木 「そうだよー、パルバルには三十六人のキャラクターが居るのさ」

本村 「へー、なんて言う名前？」

鈴木 「パレオ、バララ、エビーノ、トマトーナ、マスケラーナ、アンティコ姫、

キノコーノ、キノコーナ、コクー、フェットチーネ、ミズボー、タマボー、

カボチャーニ、アーティチョーキー、ブロッコリーノ、ナシード、

クレープぼうや、ピザパイーニ、ボンジョールノ、チーズぼうや、

マッカロニーノ、チャオチャオカイー、ママニーナ、ジェラード姫、

ウナギーナ、ウナギスラーノ、タコラッチョ、パスタッチョーナ、

スパゲッティーナ、オリーヴィーニ、パルッキオ、ワインオイシーナ、

ブーツナ、ピザーシヤ、スッポンピエロ、イカーノセピオ。

つてい言うのが居るんだ！」

朝霧 「（全部言えたら）銀ちゃんカッコイイ！」

鈴木 「さあ、まずはジェットコースターに乗ろう」

調書を読む本村。

本村 「こうして、ジェットコースターに乗り込んだ二人。犯人大山田は、

落下するコースターの中で大山アイを殺害し」

大山田 「待て待て待て待て！（つつこむ）」

本村 「『浜名湖パルバル殺人事件』」

大山田 「アトラクションか！大体、パルバルで殺したのに何で海岸で見つかるんですか」

本村 「（コースターが落ちるときの遠心力で飛ばされた的な説明をする）」

大山田 「そんな馬鹿な！だいたい、銀ちゃんカッコイイって、僕じゃないでしょ！」

本村 「大山田君、君には想像力というものが無いのかね。もっと柔軟に行こう」

大山田 「裁判で証言するのは俺ですよ！」

朝霧 「少しくらい謎が残る事件の方が世間の興味を引きやすいのよ」

本村 「という訳で残るはロープウェイか」

鈴木 「目撃証言によると、君と大山アイが館山寺の北、

大草山の頂上にあるオルゴールミュージアムに行っています。

オルゴールミュージアムへ行くには車かロープウェイ。

館山寺の空中密室ですよ！」

本村 「空中密室？」

鈴木 「つまりこういうことです」

ここから、鈴木 of 仮想の事件が始まります。

鈴木 「館山寺から引佐へ向かう、日本唯一の湖上ロープウェイ。

地上四〇メートルの高低差をわずか四分で往来するゴンドラ。

犯人、鈴木はオルゴールミュージアムからパルパルへ向かう帰りのゴンドラの中で、大山アイを殺害した。

だが、到着したゴンドラの中に、犯人の姿は無かった」

「一体どこへ？」

鈴木 「館山寺ロープウェイは日本で唯一湖の上を渡る。その湖、

浜名湖では一定時間沖に遊覧船が通っている。

大山田、君はそれを利用したのだ」

大山田 「ん？」

鈴木 「お前は、下を通る遊覧船めがけて飛び降りたのだ！」

大山田 「死んじゃう！無理に決まってるだろ」

鈴木 「じゃあ、そのまま浜名湖へ」

大山田 「同じだよ！さっき四〇メートルって言っただろ！」

本村 「（調書に書き込む）本村は元飛び込みの強化選手だった」

大山田 「経歴を勝手に変えるな！」

本村 「トビオではその名を知らぬ者はなく、フジヤマのトビウオ古橋廣之進の後継者として、ハマナコのタツノコと呼ばれていた」

大山田 「浜名湖にタツノコは居ないし古橋廣之進は飛び込みの選手じゃねえ！」

本村 「わかったわかった、ちょっと考えさせてくれ」

鈴木 「そうか！浜名湖では、パラセーリングを行う事が出来る。

お前はたまたまそこに飛んでいたパラセーリングの上に着着地」

大山田 「墜落するよ！」

本村 「あらかじめ合図を決めておいて、

パラセーリングの相手に空中でキャッチしてもらう」

大山田 「共犯者居ないんでしょ？しかもアイちゃんの死体はどうやって海岸に運ぶんですか」

本村 「すばらしい！解くべき謎がてんこもりだ！」

鈴木 「浜名湖の空中密室！ロープウェイ殺人事件！」

大山田 「だから」

鈴木 「ご期待下さい」

大山田 「何をだよ！刑事さん、今の推理 ていうか妄想には致命的な矛盾がある。館山寺のロープウェイは無人じゃない

必ず添乗員がガイドで乗ってるんだ！」

本村 「えー！！」

大山田 「アンタ乗った事無いのか！」

本村 「意外な盲点だった」

鈴木 「うかつでした！」

大山田 「お願いですからまじめにやって下さい！」

本村 「わかったわかった。じゃあもうオーソドックスに『温泉』でいこう。

館山寺には多くの温泉があるようだが、最も一般的なのは『華咲の湯』



という所らしいな」

大山田 「まあ、そうなりますかね。サゴーロイヤルとか開華亭とか、

ホテルとくつついてるところが多いですけど」

本村 「シンプルでいいじゃないか」

鈴木 「おおっと！温泉での殺人となれば私の十八番だ！」

ここから、鈴木 of 仮想の事件が始まります。

湯船の音。

朝霧の入浴シーンのなもの。

鈴木 「浜名湖の水の恵みを受け、絶景を望む館山寺温泉。

癒しと健康の源となるはずのその温泉で、一人の女性が殺された。

彼女は、ダイダラボッチ伝説が残る浜名湖で、まるで太古の自然に

とけ込むように命を落とした。『館山寺温泉湯けむり美人殺人事件』

ご期待下さい」

大山田 「火サスか！」

本村・鈴木 「この後すぐ」

大山田 「無えよ！あんたサスペンスドラマの見過ぎじゃないのか？

鈴木 「それだ！『館山寺温泉湯けむり殺人事件』パルパルではしゃぐ恋人に迫る殺意

ロープウェイから消えた女はなぜ地引き網漁で見つかったのか！

館山寺のダイダラボッチ伝説に眠る真相の秘密とは『事件』

大山田 「長い！全部入れりゃいいってもんじゃないでしょ！

もう館山寺殺人事件でいいじゃないですか！」

本村 「じゃあ、最後をZにして館山Z（ズイー）」

大山田 「ドラゴンボールか！」

本村 「いやいや、館山ゼットじゃ語呂が悪い」

大山田 「そこが問題じゃない！」

本村 「はっ！カンザス！」

大山田 「日本じゃねえ！」

朝霧 「大体なんで館山寺なんかで殺したの？

どうせなら熱海あたりでやればよかったのに」

大山田 「二人で、旅行に行ってたんです。アイちゃんのリクエストを叶えようと

思ったら、館山寺になったんです」

本村 「アイちゃん？ああ、被害者の女か」

大山田 「女なんて呼び方はやめて下さい！彼女には大山アイというれっきとし

被害者だとかホトケだとか、ましてや死体なんて呼び方はやめてほしい」

本村 「殺した相手に対してずいぶん感情的になるな。

まあ、これからじっくり聞いていくさ」

大山田 「だから刑事さんがくだらない問答してなきやもっとスツと話が進んだでしょ」

本村 「死刑台までの距離が早く近づくかもしれないというに、

ずいぶんと早く罪人になろうとするじゃないか。  
まあいい。

(調書を見る) 大山田八五郎。二十五歳。職業は自動車部品製造会社の派遣社員]

鈴木 「被害者 大山アイとは生前深い仲だったとか？」

大山田 「恋人でした。つき合って二年半でした」

本村 「大山アイは大手製造会社の事務担当、というか その会社の経営者の一人娘 だった」

大山田 「名前を言えば、誰でも知ってる会社です」

本村 「中々の美人じゃないか。こんな遺体になっても生前の面影はわかるよ。

特に顎のラインと鼻筋がすばらしい。

ただ残念な事に、吹き付ける潮風で若干髪や衣服が乱れていたがね。

だから私は言っちゃったんだよ。

鑑識の連中に。もう少し死者に敬意を払ってもいいんじゃないかってね」

大山田 「彼女、あまりファッションやメイクに興味が無かったんで。

でもあの日は、初めてであったときと同じ赤いワンピースを着て、

化粧は、崩れたら嫌だからいつも通りで」

鈴木 「死亡推定時刻は四月八日午後七時〜十時の間。

館山寺街道の入り口曹洞宗館山寺の駐車場敷地内にある食堂『館山寺園』

で、午後四時三十分頃に男性と二人で食事をとっている事が判明している。

基本的に館山寺に人通りがあるのは午後五時あたりまで。

大山アイはその同伴男性と共に館山寺街道へ向かい、

そこで殺害されたと考えられる」

大山田 「回りくどい言い方はやめましょう。その同伴の男というのは、僕です」

本村 「聞きたいのはここからだ」

鈴木 「そうだ！」

本村 「何を注文した？」

鈴木 「は？」

本村 「館山寺園で何を注文した？」

鈴木 「部長！」

大山田 「うなぎを ちょっと贅沢して、僕はうなぎ、彼女はうなぎせいろ御前を」

本村 「：.いいいいいなあああああ！」

残り 「え？」

本村 「まだ食べた事が無いんですよ！本場のうなぎ！浜名湖のうなぎいい！」

大山田 「あ、館山寺園とか、他にも色々お店がありますから

本村 「いや、今食べる！」

鈴木 「え？」

本村 「出前を取ろう！取り調べと言えぼんぶりだ！」

大山田 「あれは嘘だって思ってたけど」

本村 「嘘だよ！だがここは私の部屋だ！この場所に足を踏み入れたその瞬間から、

君たちは私の王国の一住人となったのだ。そう！ここでは私がルールブックだ！」

鈴木 「待ってください！ さつきから職務中に飲酒して音楽流して、おまけに国民の税金で賄われている銭でうなぎですって？」

本村 「税金がなんだ！ 使いもしない公民館を有り難がつてる連中に、うなぎの一匹や二匹で文句言われる筋合いはないね！

そもそもうなぎがこの浜松の名産品だと言うのなら、

積極的に消費してやっている我々に感謝の一つも行ってもらいたいもんだ」

鈴木 「ですが！」

本村 「なんだなんだ？ 日本海育ちのカニじゃなきゃお口に合わないってか？

君のそのよく回る舌はうなぎを味わうためには使えないって事かい？」

鈴木 「そんな事は言っていないよ」

本村 「どうなんだ？ 食べたいのか食べたくないのか？」

鈴木 「…食べたいですよそりゃあね！」

本村 「そうそう…腹が減ってはなんとやらってやつだ。

うなぎたらふく食ってよお。事件も解決してよお。

みんなで幸せになろうよ。（電話を取る）私だ！そう、私だとも！

出前を注文してもらいたい。うなぎだ！うなぎを持って来い！

ああん？馬鹿野郎！浜名湖と言えばうなぎだろうが！

ここをどこだと思っているんだ！館山寺だぞ！」

電話をきる本村。

大山田 「おいしかったですよ。ふわふわのウナギに黄金の輝きを放つタレ。

真珠のような白米にウナギのうまみと甘みがしみ込んで、

どんぶりのフタを開けた瞬間から立ち込める白い湯気。

湯気の向こうに蟹気楼のごとく横たわるウナギ。

その瞬間、私は単なるウナギを食べに来た客ではなくなりました。

そう！まるで黄金の都エルドラドをついに発見した冒険者！

光り輝くそのウナギ、いや都を発掘し！じつくりと味わったのです」

唾をのむ一同。

朝霧 「ああ、もう我慢できない！なんて誘惑の多い日なのかしら！

アツいウナギ！そして斗瓶取りした大吟醸おり酒」

大山田 「大吟醸ですって！なんと、これが噂に名高い

斗瓶取りした大吟醸おり酒ですか！」

朝霧 「ご存知ですか？斗瓶取りした大吟醸おり酒を」

大山田 「なかなか手に入らないんです。この斗瓶取りした大吟醸おり酒は」

朝霧 「私はよく嗜みますわ。この斗瓶取りした大吟醸おり酒を。

フルーティーな香り。トロみのある口当たりのなかにほんのり甘味、

シュワっとした炭酸がまるでシャンパンにも似た爽やかな喉越しを醸し出す一品」

大山田 「ああ、斗瓶取りした大吟醸おり酒よ！ 忘れじの恋人にも似たその名前。そのしたたりを私の唇に！」

朝霧 「斗瓶取りした大吟醸おり酒」

大山田 「斗瓶取りした大吟醸おり酒」

鈴木 「斗瓶撮りした大吟醸おり酒」

朝霧 「好みが合いますわね、私たち」

鈴木 「そうですね！ですがご覧ください、本村部長刑事がドン引きしています」

本村 「なんだかさつきも同じような場面を見た気がするが」

朝霧 「まあまあ、どんぶりが届くころには事件も解決していますわよ。」

そうしたら、祝い酒といきましよう？」

本村 「さて、食料が到着するまで三十分ほどか。そろそろ話を進めよう」

朝霧 「四月九日午前十一時、浜名湖内を巡る遊覧船が舘山寺に近づいた時、

乗客の一人本田朔太郎が海岸にたたずむ大山アイの姿を見つけた。

赤い海岸に赤い服の女。絵になると思った彼は望遠レンズで写真を撮った。

だが、ファインダー越しに飛び込んできたのは、既に息絶えた遺体だった。

異変を感じた本田は遊覧船の船長に報告し、警察に捜査依頼が入った。

鈴木 「実際には、海岸の岩石に倒れないようにもたれさせられていたそうです」

本村 「本田朔太郎の野郎がその時写真撮っていらやあ、

鑑識の素人どもよりいい絵になったろうに」

朝霧 「凶器は現場に落ちていたスカーフによるものと思われます」

本村 「いまひとつ面白くないなあ。発見まではいい感じなんだが、

なんでスカーフなんだ？」

鈴木 「被害者が身に着けていたもので、その場にあったからでしょう」

本村 「その場にあったから？ なんと安直なやつなんだ！

ってことは、もしその場にウナギが落ちてたらウナギ使って絞め殺すのか？」

本村・朝霧・鈴木 「（ハツとして）ウナギ！」

朝霧 「（調書に書き込む）じゃあ、凶器はウナギということで」

大山田 「ありえないでしょう！ぬるぬる滑って持てたもんじゃない」

朝霧 「三本の指でこう掴めば」

大山田 「そんな難しいこと」

本村 「難しそうでも♪」

朝霧 「やってみようよ♪」

鈴木 「つまづいたって♪」

大山田 「あきらめないで♪ ああっ！しまった！」

本村 「だいぶわかってきたじゃないか、大山田君」

鈴木 「やはりこの曲が流れると浜松人は歌いだすんですね！」

大山田 「（このままでは先へ進まないと感じて）凶器はスカーフではありません」

朝霧 「やっぱりウナギ」

大山田 「違います！ 僕が…この両手で…彼女の首を絞めて殺しました」

本村 「一つ不可解な点がある。彼女の毛髪の一部が切り取られていた」

大山田 「僕がやりました」

鈴木 「なぜ？」

大山田 「約束だったんです彼女との」

本村 「約束？」

大山田 「自分が死んだら、体のどの部分でもいいから、僕と一緒に居させてほしいって。僕は約束通りに、永遠と一緒に居られるようにしたんです」

本村 「永遠に一緒というのはどういう事だ。」

大山田 「身体検査では人間の髪の毛なんか出て来なかった」

大山田 「刑事の割に勘が鈍いんですね。彼女は、僕の一部になったんです」

鈴木はそう言って、胃の当たりで拳を握りしめる。

本村 「（驚きの表情）…！植毛！」

大山田 「違います！」

本村は、鈴木の頭皮を食い入るように探る。

抵抗する鈴木。

本村は調書に書き込む。

本村 「五年後が心配だ」

大山田 「アンタに言われたくねえよ！（素で）手遅れじゃねえか」

鈴木 「君たちはお互いに三日間の休暇を取っている。」

館山寺で旅行でもしてたのか？

大山田 「そうです。刑事さんが言う通り、熱海にでも行ければよかったです、

館山寺にしました」

鈴木 「四月六日からの行動は？」

大山田 「その日は、前日からの夜勤明けでした。

同僚の鈴木に引継ぎを行って、派遣元のコーディネータの鈴木さんと打ち合わせをした後、一度アパートに帰りました。

別にアリバイを証明する事は無いですが、アパートに帰った時、管理人の鈴木さんに挨拶をしてるんで、確かめて下さい。

六日の朝、高校の同級生の鈴木から電話があって、今度結婚すると聞きました。けど、式には出席できないと返事をしました。

これも確認してもらえればと思います。

二次会でもいいからと言われたんですが、東京で役者をやってる鈴木が出席するというので、そいつに任せられた方がいいと言いました。

ここまでで何か？」

本村 「ちよっと鈴木が多くないか？」

大山田 「石を投げれば当たる土地柄なもんで。」

とにかく、その後鈴木さんと鈴木から電話があつて有休の確認をしたあと」

鈴木 「どの鈴木？」

大山田 「会社のです」

鈴木 「（不思議な納得の仕方をする）」

大山田 「とにかく、午前9時に浜松駅でアイちゃんと待ち合わせして。

自分の車で館山寺へ向かいました」

本村 「なるほど、二泊三日の館山寺旅行か。で、宿泊先が：ホテル九重！」

大山田 「（自慢げに）そうです！」

本村 「私も泊まった事無いのに！」

大山田 「後は、刑事さんの部下に話した通りです」

鈴木 「なぜ自首した」

大山田 「死ぬ事も考えました。でも、自分が生きて罪を償う事が、

何よりも重要な事だと判断しました。

僕はアイちゃんの思い出とともに生きていく事を決めたんです」

朝霧 「動機は？」

大山田 「え？」

朝霧 「動機は何なのよ？ 事件当日の足取りもはっきりしてる。目撃者も十分に居る。

特に不可解な謎がある訳でもない。そして犯人がここに居る。

これじゃあ部長が活躍するところが無いじゃない！。

ここまでわかりやすい事件だと、残る捜査対象は動機しか無いわけ」

大山田 「動機って」

本村 「どんなに謎が多い事件でも、所詮人間が起こした物だ。

だから解けない謎などは無い。だが、いくら推理しても証拠を集めても、

なぜ殺したのかという動機だけは、計り知れる物ではない。

人の心は複雑だ。かといって、単純な動機では困る！

痴情のもつれだとか、金銭トラブルだとか、

ましてや衝動的な喧嘩のはてだとか！そこにドラマは無い！」

朝霧 「私たちが気に入るような事情があればいいの。

頭に血が上って覚えてないなんて、情けないこと言わないでよね」

大山田 「ちゃんと覚えてる！この手が、この体が、心が！」

本村 「：聞かせてもらおうか？」

大山田 「僕らが出会ったのは、今から三年前。僕の派遣先が彼女の勤める会社でした。

彼女は地元の大学院で経済学を学んで、自分の親の会社へ入社しました。

当時の僕は生産工場の組み立てラインで働いていました。

技術系の会社なので、新入社員は必ず研修として現場の生産ラインを経験します。

それは、彼女もそうでした。

その生産ラインで、僕は隣通しになりました。

僕の契約期間が終わって、彼女も研修を終えて配属先に戻る事になっても、

僕らの交流は続きました。

でももう僕は、彼女の素性なんて関係なく、人として彼女の全てを愛していました」

朝霧 「交際が二年を超えた頃、八五郎さんプロポーズしてくれました。

嬉しかった……でも、私はすぐには返事ができませんでした。

私の父は支配的で、会社にとって有益になる人間を婿に迎えたいと思っていたようです」

鈴木 「僕はしがない派遣社員で、特に彼女の会社に貢献できる物を持ち合わせて居なかったんです。

それでも僕は、誠心誠意本音で向かい合えば、わかってもらえると信じて、彼女の父親に結婚を頼みに行きました」

本村 「出て行け！貴様のような馬の骨かもわからん奴を娘と一緒にするわけにはいかん！」

鈴木 「受け入れてもらう事は出来ず、僕らは駆け落ちを決意したんです」お笑いですよ。この二一世紀の世の中で」

朝霧 「でも、わかっていたんです。二人に未来が無いってことは」

本村 「許されない恋、私達は運命を切り開こうとした、けどその先に未来は無かった」それでも二人は信じた。その時だけは、二人を祝福するかのよう

に汽車の汽笛が鳴る」

鈴木 「汽車？」

本村 「逃避行と言えば夜汽車だろう！」

朝霧 「大井川鉄道ね！」

さて、ここで汽笛の音と音楽が流れ始めます。なぜかマイクを手にして出てくる本村。

本村 「叶わぬ恋と知りながら、引かれ合うのが男女の運命。

越すに超えれぬ大井川、それは二人の恋路を示すかのよう！

手に手を取って駆け出す二人に、夜汽車の煙のように

一筋の道が見えるのだろうか。そんな思いを込めて歌います」

という前口上をやったあと、本村はなぜか歌いだそうとしますが、直前で止まります。

大山田 「人の回想に割り込まないでください！」

本村 「何ですか？」

大山田 「何ですかって、何なんですかこれは！なんで途中からアンタ達が回想シーンやってるんですか！それもデタラメな！」

朝霧 「ここからが盛り上がるころなのに！」

大山田 「だからだよ！だいたい大井川の汽車は夜走ってない！」

本村 「お前らみたいな奴らの動機なんざ、簡単に想像できるってことさ」

大山田 「プロポーズしたあたりまでいいです。ですがそのあとは違います」

鈴木 「そうか！断られた腹いせに殺ったんだな？それもこっぴどく捨てられた？」

大山田 「いやその・・・」

鈴木 「わかる！わかるよ君のその気持ち！女は時として

思いがけない変化球を投げてるものだ！

（ここで鈴木は、『変化球を投げられて、辛うじて打ち返し、

盗塁確実かと思いきやアウトになった』

というシチュエーションをボール女心にして演じ、

思いがけない裏切りの悔しさを例えます）

・・・まったく、とんだ番狂わせだ！」

大山田 「動機は何かというならば、彼女を愛していたからです」

本村 「愛していたから…殺した？」

大山田 「そうです。僕は、愛ゆえにアイちゃんを殺したんです！」

本村 「じゃあ 動機は、愛していたからだっていうのか？」

大山田 「そうです。それが動機です。

僕だって、彼女を死なせたくなんか無かった！

一緒に未来を紡いでいきたかった！」

本村 「わからない」

大山田 「え？」

「人は、死ぬほど愛するか、殺したいほど憎むかしかない。

殺したいほど愛する それはどういう事なんだ！」

大山田 「理解されないのはわかっている！それでもそうだったとしか言えないんだ！」

本村 「頼むからまじめに考えてくれ、一世一代の君の事件だぞ？」

なにかもつとドラマ性にとんだ背景を考えられないのか？」

鈴木 「彼女が僕との結婚を拒んだのは理由がありました。

彼女は、不治の病を抱えていた」

本村 「不治の病？」

鈴木 「記憶障害の一種で、少しずつ物事を覚えていられる時間が短くなっていく。

館山寺を旅行したときは 一週間の記憶が限界でした。

アイちゃんは言いました」

「これからもっと、物を覚えていられる時間が短くなる。

そのうち、あなたの事も、自分の事もわからなくなる。

自分の事がわからなくなるよりも、あなたの事を忘れてしまうのが怖い。

だから、一番楽しい記憶を残して、私を殺してくれって」

「自分から殺される事を望んだというのか？」

鈴木 「僕は言いました！アイちゃんが何度記憶をなくしても、

僕は何度でも君と思い出を作る！

たとえ君が僕を忘れても、また最初から始めればいいって！

君が自分の事を忘れても、僕が何度でも教えてあげるって！



けれど」

朝霧 「あなたを好きなこの気持ちを忘れるくらいなら、生きていても意味が無い。

あなたと出会った三年間が、私の人生の全てだった。それを失ったら、どんなにあなたから愛されても、生きていないのと同じだって。だから、一番楽しい思い出の中で、私の人生を終わらせて」

鈴木 「僕たちは最後の思い出を刻むため、二泊三日の旅行へ。

楽しかった。館山寺」

本村・朝霧「館山寺」

鈴木 「二人で見上げた聖観音」

本村・朝霧「聖観音」

朝霧 「安倍総理に似ています」

鈴木 「そうなんですか!？」

朝霧 「もうそっくりなんですよ!」

本村 「しかし今一つだなあ。どこかで聞いたことがあるストーリーだ」

朝霧 「じゃあ、旅行中に大山アイが倒れて、助けてください!っていうのは」

鈴木 「まるパクリじゃないですか」

本村 「静岡県だからな。日本のだいたい中心で『アイーっ!』って叫ぶ」

笑いあう三人。

本村 「(大山田に)なんか言えよ!」

大山田 「なんなんですか。なんなんですかこれは!

俺の事件はアンタたちのおもちゃじゃない!」

本村 「何様のつもりなんだ!お前はそれほど大それたことをやったのか?自分が世紀の大犯罪者にでもなったつもりかね?

人の命は大切だ。人殺しは悪いことだ。そんな御託はガキでも知ってる。

今は直虎だの家康だのが群雄割拠していた戦国時代ではない。

命を懸けてしのぎを削る世の中でなくなった以上、

殺しを実行するハードルは防潮堤より高いのだ!

それとも、いつの間にか誰でも簡単に人を殺せる世の中にもなったのか?

お前は普通の人間が超えないはずの一線を越えた!

それが何の華やかさもなかったあの過ちなら、お前は価値のない、

無駄な時間をこれから過ごすってことだ」

繰り返しになるが、愛していたから殺したとはなんだ?

大切な物を壊す事が出来るのか?私には理解できない。

理解できない物を、私の事件の動機として認める訳にはいかんよ!」

鈴木 「部長、言い過ぎでは」

本村 「もっとシンプルかつ驚きに満ちた動機でなければ

誰もが納得し自分も一歩間違えれば同じ動機で人を殺してしまうかもしれない

という動機が必要なんだ！

そうでなければ殺人などという恐れ多い行動に踏み切るわけがない！」

大山田 「アンタみたいな無能な刑事は見たことが無い！」

本村 「お前がどれだけのデカを知ってるっていうんだ！」

我々はお前のようなちっぽけで無意味な連中を相手にしているほど暇ではない」

大山田 「この事件はあんたの事件かもしれないが、

この事件を起こした俺の人生も、感情も信念も俺の物だ！」

本村 「お前の気持ちなんかどうでもいいんだよ！自分がいざれまたシャバに戻って、

相手を愛しすぎたが故に命を奪ったと講演会でも開くつもりかね？

残念ながら私はそれほど甘くはない

お前はな！ただ、彼女と生きていく事が怖かった！

心の奥底では、彼女を自分の人生から退場させたかった！

罪を犯しその罪を償う事で薄っぺらいお前の人生に、

悲劇の主人公という栄光の光が与えられるのだから！

私を知る愛という物は、たとえどんな犠牲を払っても大切な相手を守ろうと

する物のはずだ！だがお前はそれをしなかった。

大山アイの人生を背負う勇気がなかったんだ！

お前は『愛』という曖昧な大義名分で、自分の犯罪を正当化しただけだ！

愛する人間を、自分を愛した人間を殺す。

なぜそんな事が出来たのか。それはお前が、人間じゃないからだ！

さあ、もう下手に取り繕うのはやめて認めたまえ。

歴史にも記憶にも残らない、自分勝手な殺人を起こした！とね」

大山田 「……」

本村 「朝霧君、容疑者のお帰りだ。準備したまえ」

朝霧 「部長」

本村 「朝霧君！」

朝霧 しつぶ外へ出ていく。

本村 「あいにく人間以外は捜査の対象外だ。

檻に入りたければ、浜松動物園にちようどいいのがあるぞ」

本村 「……」

鈴木 「あなたのやり方。しかと見届けました」

鈴木 振り向きもせず出ていく。

本村も去ろうとしたその時。

大山田 「刑事さん！俺は…！」

大山田が意を決して何かを言いかけた時、

鈴木と朝霧が笑顔で入ってくる。

鈴木・朝霧「部長！うな重届きました！」

本村「あーっ！そうだった！すっかり忘れていたよ！」

朝霧「炭火でじっくり、でもジューシーですわ」

本村 うきうきと二人に続いて出て行こうとする。

大山田 「あの…！」

本村 「大山田君わかるかね？」

君のやったことなど、うな重一杯分の価値もないってことだ」

本村 出ていく。

一人残された大山田。

館山寺の音が捜査室を駆け抜けていく。

大山田 「…僕らが出会ったのは、今から三年前。僕の派遣先が彼女の勤める会社でした。

新人を含めた歓送迎会。その次の週から始まる厳しい生産実習を前にした、  
ねぎらいの会でした。

そこへ、真っ赤なワンピースをまとった彼女が現れました。

彼女は地元の大学院で経済学を学んで、自分の親の会社へ入社しました。

当時の僕は生産工場の組み立てラインで働いていました。

技術系の会社なので、新入社員は必ず研修として現場の生産ラインを経験します。

それは、彼女もそうでした。

その生産ラインで、僕らは隣通しになりました」

アイ 「楽しいですか？」

大山田 「え？」

アイ 「来る日も来る日も機械を止めないように、同じ作業の繰り返し。

ボルトを入れて、トルクを測って蓋をかぶせて、

思考が止まっても体が動く。

世の中に操られている人間そのものみたいですよ」

大山田 「まあ、確かに。しかしお嬢さんは研修ですから、半年もすれば事務方ですよ」

アイ 「お別れですね」

大山田 「まだ初日ですけどね」

アイ 「私はどんなことでも終わりから考えるんです。

終わりがあるから日々を精一杯に過ごせるとは思いませんか？」

大山田 「なるほど」

アイ 「工場長に交際を申し込まれました」

大山田 「工場長って…それはまた。あの親父年甲斐もなく」

アイ 「全く身の程って言葉を改めてわからせる必要があるなど初めは思ったもんです。なんでこの私がバツイチの脂ぎった親父と釣り合いが取れると思われたのか。ってね。でも実際関わって見るとなかなかどうして悪くないもんです。父性っていうんでしょうかね。父の大きな胸に抱かれているような安心感があります」

大山田 「大きな胸に…」

アイ 「あなた今想像しました？ 私があの工場長と愛の契りを交わしている様を」

大山田 「いやそんな？」

アイ 「心がざわつきました？ 私みたいな美人があんなヒヒ親父に

いいようにされているなんて考えたら」

大山田 「随分な言い方じゃないですか」

アイ 「でもいいんです。愛してくれるそうですから。私だって女ですから、

愛を囁かれれば嬉しくもなるんです」

大山田 「なんで僕にそんな話を？」

アイ 「隣にいたからです。それ以上でもそれ以下でもありません。

大山田さんは私の教育係でしょう？ だったら教えてくださいよ。いろいろと」

大山田 「僕は既に一年以上経験があったので、彼女のサポートするうちに、少しづつ話すようになっていったんです。

元々女性の少ない職場で、しかも他の社員とは若干立場が違う事もあり、彼女は職場での居場所を見つけられずに居たんです」

アイ 「先日、男と別れました」

大山田 「またですか！ 今度は三日と持ちませんでしたね」

アイ 「恋という時には下心があるとはいいますが、彼には下心しかないようでした。

文字通り心のままに動く本能の塊」

大山田 「それは大変でしたね」

アイ 「でも行動に移そうとするだけ男気があるってもんですわ（大山田を見る）」

大山田 「なんででしょうか？」

アイ 「いいえ。何をされそうになったか知りたがっているような目をされていたので」

大山田 「そんなことは」

アイ 「大山田さんて、私の言うことに相槌をうつ才能は確かですね」

大山田 「色んな偶然が重なって、僕らは…いや僕は次第に彼女を

視線の先に追いかけるようになっていました」

アイ 「なぜ私のことを見るんですか？ 気持ち悪いです」

大山田 「ごめんなさい…今日で僕の契約期間も終わりです」

アイ 「そうですね。寂しいですか？」

大山田 「まあそりゃあ」

アイ 「聞いているんです。寂しいんですか？ 寂しくないんですか？」

大山田 「寂しいです」

アイ 「なら他に言うことがあるんじゃないですか？」

大山田 「またいつかどこかで」

アイ 「はー！ がっかりです！ 此の期に及んでそんなチンケなセリフしか口にできないんですね」

大山田 「は？」

アイ 「この地球上に、六〇億とも七〇億とも言われる人間がひしめく中で、男と女が出会って長い時間を過ごすなんて機会はそうそうあるもんじゃありません。

実際、私を通り過ぎていった男たちは、本当にただの通りすがり、空気の抜けた風船みたいに風まかせに去っていったもんです」

大山田 「どの方とも、あまり長続きしていませんでしたね」

アイ 「私、生まれてこのかた、欲しいと思って手に入らなかったものはないんです。そりゃあもちろん、手に入れるためにそれなりの努力もしたし、少し違う形でやってきたものもありましたけど」

大山田 「羨ましい話です。俺なんか、学もないし、特技もないし・・・、家と職場を往復するだけの侘しい毎日です」

アイ 「私、知ってるんですよ。大山田さん」

大山田 「何をですか？」

アイ 「朝の通勤路で、作業中のラインで、休憩中の食堂で、私の事、見てたでしょ？」

大山田 「な…何を言ってるんですか」

アイ 「隠さなくたっていいじゃないですか！ 私、人の視線には敏感なんです。時には刺すように、時にはまとわりつくように、時には優しく愛撫するように。チラチラチラ見てたじゃありませんか！」

大山田 「そんなことはありません！」

アイ 「獲物をねらう狩人のようなギラついた目ではありません。

まるで捨て犬が、飼い主を待ちわびて不安に怯えているような目。私ね、後半はわざとあなたの視界に入るようにしていたんですよ」

大山田 「…そうだったんですか…？」

アイ 「認めた…！ 認めましたね？ 私のことを見てたって」

大山田 「それは…」

アイ 「否定するのならいいですよ。ちゃんと私の目を見てください。ほら！」

アイは大山田を自分の方へ向かせる。

アイ 「君になんか興味ない。勘違いもいい加減にしたまえ。って」

大山田 「……」

アイ 「あれ？ 言えないんですか？ あんなに必死で否定してたのに」

大山田 「僕は…」

アイ 「わかっています。この私を愛してしまっただけです」

大山田 「ずいぶん見上げた自信ですね」

アイ 「だから！違うならちゃんと目を見て否定してください！

できないでしょう？ あなたがはっきり意見を言えないのもわかります。自分で言ってみましたもんね？ 何もない侘しい毎日。

誇れるものもない自分がこんな人並み以上の相手に思いを持っていいはずがない」

大山田 「やめてください」

アイ 「私はね。あなたみたいな人をずっと探していたんです」

大山田 「はい？」

アイ 「本当の気持ちを押し殺して、溢れる情欲を表現することもできない。

目の前に千載一遇のチャンスが転がってるのに、手を伸ばせずに足踏みしてる。

そう言う男が私の前で変わっていくのを見るのが、ずっと夢だったんです」

大山田 「あなたが男と長続きしない理由がよくわかりました。

そうやって相手をやり込めて、常に自分が上に立とうとする」

アイ 「それが悪い？ 子供の頃からそうやって生きてきたんですもの。

今更変えられないわ。そりゃあ、ちょっと特殊な事情の家庭に生まれましたし、生まれてついでにこの美貌と才能ですもの。

人にはわからない苦労も色々ありました」

大山田 「よく自分でそんなことを！」

アイ 「美しく生まれて何が悪いの？ 恵まれた人生を与えられて何が悪いの？

わかる？ 私が自分の力で手に入れたものじゃないのよ？

初めから揃っていたものにどう自信をもったり無くしたりしろと言うの？

今までの男はそう、私のことを知ると、

みんな薄汚いものを見るような目で去っていった。

結局私を自分の所有物にしたいって本性がよくわかったわ」

大山田 「所有物だなんて」

アイ 「だから私は、私が自分の力で手に入れた自分だけの心が欲しいの。

あなたは、私を変えていくのよ。これって素敵なことだと思わない？」

大山田 「僕は帰ります！」

アイ 「どうして！ もう少しゆっくりお茶でも」

大山田 「あなたには付き合ってもらえない！」

アイ 「でもあなたなら！…あなたなら、私を所有物にしようなんて思わないでしょ」

大山田 「…」

アイ 「その勇気もないもの。あ！ごめんなさい、バカにしているんじゃないの。

安心しているの。それだけあなたの卑屈で真摯な思いが伝わってるってこと」

大山田 「僕は…」

アイ 「ちゃんと目を見て言って」

大山田 「あなたを愛する自信がない（去ろうとする）」

アイ 「（刃物を取り出す）代わりのきく愛に流されるくらいなら、

誰のものにもならず死ねわ！」

大山田 「何やってるんですか！」

アイ 「この広い世界でやっと自分が自分の力で見つけた本物の愛だと思ったけど、  
そこまでまっすぐ否定されたらもう…さようなら（刃物をひく）」

大山田 「愛しています！ 本当はあなたをずっと！ ずっと思っていました！

会社と家の虚しい往来も、あなたがいたから！ あなたに会えるから辛くはなかった！  
でも、これ以上この思いが育ったら、必ず来る別れは辛すぎるから！  
だから自分に嘘をついていた！ 僕はあなたを愛しています！ 心から！

アイ 「…（刃物を落とす）フフフ」

大山田 「（落としたものを見て）これは…、髪留め？」

アイ 「人間そうそう死なんもんです！ あなたの本音、しかと受け止めました」

大山田 「い、今は」

アイ 「嬉しい…、どんな強いカクテルよりも痺れたわ」

大山田 「まるでだまし討ちのような始まりだった。でも、抗えなかった。

彼女の子供のような無邪気さ、老婆のような辛辣さ、そして娼婦のような微笑み。  
甘い毒がゆっくりと体を回っていくように、  
僕は気がつけば彼女の全てを愛していました」

アイ 「なぜ？」

大山田 「わからない。でも、心をざわつかせるこの気持ち。

締め付けるような、刺すような…僕は、確かに彼女を愛していた」

アイ 「愛してるなんて気安く言わないで。言葉だけなら、なんだって言えるわ」

大山田 「言葉だけなもんか。僕は君を愛してる」

アイ 「嘘よ」

大山田 「愛してる」

アイ 「嘘よ！」

大山田 「愛してる！」

アイ 「嘘よ！」

大山田 「……」

アイ 「ふふ…私の勝ちね。その迷子みたいな顔。好きよ」

大山田 「彼女は、純粹な愛の持ち主でした」

そして、凶暴な愛の持ち主でした」

アイ 「あなたが十の言葉で愛を語るなら、私は百の言葉でそれを否定するわ。

だから、千の叫びで私を離さないでね」

大山田 「こんなに愛してるのに、愛し合っているはずなのに、

どうしてそんなに意地悪するんだ」

アイ 「意地悪じゃないわ。私はいつもあなたに愛されていたいの。

いつもあなたの心の中心にいたい。

安心なんかさせない。起きてるときだって、

眠っているときだって、あなたの瞳に映るのは私だけなの。

私もそうだよ、八五郎」

大山田 「ゆがんだ愛かもしれません。でも、構わないと思っていました。だけど…

結婚？」

アイ 「そう」

大山田 「そんな、まだ心の準備が」

アイ 「あなたとじゃないわ。父が選んだ相手と」

大山田 「どうしてそんな！」

アイ 「：悔しい？」

大山田 「どうしてなんだよ！」

アイ 「私は、あなたのものにはならない。でもすぐそばにいてあげる。

あなたは私への思いを抱えて、ずっと生きてくれるでしょ？」

大山田 「アイちゃん：：」

アイ 「ごめんね。でもこうしないと、あなたの愛が信じられないの。

こんな、都会でも田舎でもないところじゃ、どっちつかずの平凡な人生を送って、  
退屈に死ぬのがほとんどよ。

お金でも仕事でもなく、何を抛り所に生きていくか。

人は、愛があればどこでも幸せになれるっていう。

でも、私はそれをはっきり確かめたいの」

大山田 「僕に愛されるために、離れるっていうのか：：」

ずっと君を想い続けて生きろというのか！そんなの呪いじゃないか！」

アイ 「だったらどうやって奪う？どうやって自分だけものにする？

いっそ：：私を殺したくなる？自分のものにならないなら」

大山田 「：ああ。その方がマシだ」

アイ 「：だったら：いいわよ。あなたになら、奪われてもいい。

心も体も：命も」

大山田 「理解されないのはわかってる！それでもそうだったとしか言えないんだ！

彼女もそれを望んだ！だから、最後に二人で一緒に居ようって、

彼女の願いを出来る限り叶えたかった。

遊園地で絶叫マシンに乗りたいたい。きれいな音楽を聞きたい。

船に乗りたいたい。温泉に入りたいたい。ロープウェイで景色が見たい

おいしい物が食べたい。動物園に行きたい：：。

この望みを叶えられる場所は、館山寺しか無かった。

僕らは三日間、館山寺を堪能しました。

遊覧船に乗って、ロープウェイで景色を見て、オルゴールミュージアムで

百年前の音楽を聴いて、おいしいうなぎを食べて、動物園に行って、

パルパルで遊びまくって、九重に泊まって、温泉に入って。

楽しかった。人生で一番と言ってもいいくらい楽しかった」

波打ち際で、地面に「の」の字を書くアイ。

アイ 「ねえ、ゲシュタルト崩壊って知ってる？」

例えば、『の』って何回も何回も繰り返し書いてると、



『の』って字がどういいうものだったかわからなくなっちゃうってやつ。  
愛はどうかしらね？ こんなに何度も愛を考えてる。

だんだんわからなくなるのかしら」

大山田

「館山寺街道奇岩岩。黄昏時の波打ち際で、沈む夕日を眺めていました。地面も浜名湖の水面も真っ赤になって、赤いワンピースを着ていたアイちゃんはまるでその風景にとけ込んで、一枚の絵のようだった！

アイちゃんは言いました」

アイ

「きれいな。ここに彼岸花が地面いっぱい咲いていたら、きっとあの世とこの世の境目を見たような気分でしょうね。

こんな風景が見られるなら、地獄でも構わないわ。

あなたが本気で私を愛しているなら、あの夕日が沈んだら、私を眠らせて」

大山田

「できないよ！できるわけがない」

アイ

「ほらやっぱり。でもいいの？ もう私は永遠にあなたのものにはならないのよ」

大山田

「……」

アイ 「そうなのね。その勇気もないのね。その程度の愛し方で私が手に入るとでも……

大山田は朝霧の首を絞めにかかる。

アイ

「…そうよ。あなたの両手で私の首を絞めて。

道具は使わないで、あなたの体温を感じていたいから。

大山田

「目を閉じた彼女の首にかけた手に、力を込めました。

中指の先に、彼女の動脈が当たり、彼女の鼓動を感じました。

今にも折れそうな細い首、でもその時の彼女は確かに生きていた。

僕はそのまま、長い口づけをかわして、ゆっくり ゆっくり

力を込めていきました。

やがて、動脈から伝わる彼女の鼓動が激しくなり、

少しだけ表情が歪みました。けれど、彼女は最後の吐息で

こう言ってくれたんです」

アイ

「愛してる（大山田の腕の中でこと切れる）」

大山田

「当たりが暗闇に覆われる頃、僕は彼女の命を終わらせました。

けれど、最後に彼女は笑っていた。笑っていたんです！」

そこへ、本村と鈴木がうな重をもって入ってくる。

本村

「君は詩人になるべきだな、大山田君」

大山田

「刑事さん！俺は！」

すがろうとする大山田を本村はぶつ。

本村

「気安く触るんじゃねえ！この殺人犯が！」

床に倒れた大山田は「殺人犯」と呼ばれたことに喜びすら感じている。

本村 「さあ！取り調べを続けよう！ここにいる犯人、大山田八五郎が興した、

館山寺殺人事件のな

鈴木 「はい！」

大山田 「よろしくお願いします！」

朝霧 「まずはウナギでもいかが！出来立てのアツアツよ」

朝霧は、出前のうな重を大山田にも渡す。

一斉に一口食べて。

本村 「うん！いい火加減だ！」

了